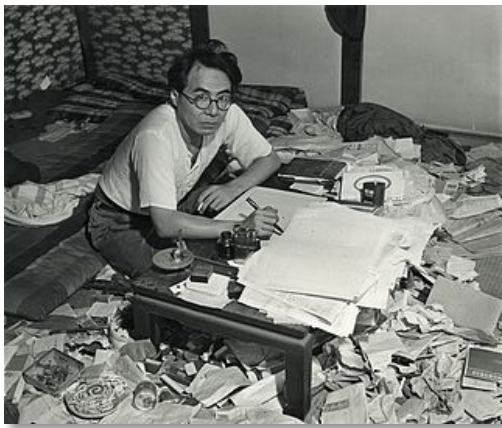


## 【本の紹介】

### 呉清源「坂口安吾全集 07」

**近**現代日本文学を代表する作家の一人に坂口安吾がいます。純文学や歴史小説、推理小説の他にフランス文学を翻訳しています。趣味としての囲碁はつとに知られ、その観戦記などを書いています。昭和12年に京都にいたときは、碁会所の席亭として生活していたとも書かれています。

私は最近、筑摩書房から平成2年に出版されていた「坂口安吾全集 07」にある「呉清源」というエッセイを読む機会がありました。月刊読売に頼まれて、呉清源と五子で対局したそうです。安吾本人は五子は元々ムリなのを承知のうえ、白を攻めて、呉清源が自分よりも長考するような場面が現れたとあります。しかし、深く読みを入れられたので勝てる筈がなかったと述懐しています。安吾が曰く、自分が呉清源の大石を攻め始めてからの彼の態度が、真剣で、その闘志はまるで「棋院の大手合の如くであり、一匹の虫を踏みつぶすにも、虎が全力をつくすが如くである」と書いています。



坂口安吾

昭和3年に呉清源は日本にやってきます。翌年に日本棋院より三段の段位を認められます。当時小目中心の布石が主流の中で、呉清源は初手から天元や三々、真似碁を試みたようです。昭和13年頃から紅卍字会という中国の新興宗教に帰依し活動します。その間、対局などから離れ碁の空白の時間だったようです。

やがて数々のタイトル大会に挑み、安吾は観戦記を書いています。昭和23年に読売新聞主催の打ち込み十番碁で岩本薫八段（本因坊薫和）と呉清源八段との打ち込み十番碁の第一局を取材しています。対局場は小石川のさる旅館で持時間13時間ずつ、3日間で打ちきるのです。3日目の対局が、呉清源の一目半勝という結果で終わったのが夕方5時頃で、記念の会食の用意の声を聞きながら、観戦の何十名という人たちがまだ観戦の雰囲気からさめやらぬうちに、真っ先に対局場からいなくなったようです。

この十番碁の対局の第1日目、第2日目、いずれも先番の本因坊に有利というのが専門家の評で、第一局は本因坊の勝がすでに明らかだったようです。3日目の午前中まで、まだそうだったのですが、呉清源はあくまで勝負を捨てず、本因坊がジリジリと悪手を打って最後の数時間のうちに自滅してしまったというのです。



呉清源と木谷實

『呉清源は、およそ人の思惑を気にするところがない人物で、わが道を行く、とことんまで、わが道であり、常に勝負は必死であり、一匹の虫を踏みつぶすにも必死であり、その激しさが、自己の限界というものと争う苦痛に直面した場合の厳しさは、言語を絶するものがある筈である。この男には、およそ人間の甘さはない。芸道の激しさ、必死の一念のみが全部なのである。』

この対局後、酒にほろ酔いの本因坊薫和が安吾に言うのです。『呉さんの手は、当り前の手ばかりです。気分的な妙手らしい手や、シャレたような手は打ちません。ただ正確で、当り前なんです。』本因坊は、呉清源に比べて気分的、情緒的、浪漫的であり、結局、呉清源の勝負にこもる非人間性、非人情の正確さに食い込まれてしまうらしい、というのが安吾の見方です。

終わりに安吾は、織田信長を引き合いに出し、呉清源的な非人間性によって信長は大成した大将だったというのです。この非人間性が、勝負師の天分ではないか、彼らの魂は、勝負の鬼の魂であり、人間的な甘さの中で休養をとってまぎらすようなことはしないというのです。中国と日本の性格の相違でもないと断定します。坂口安吾の独特な言い回しの実に示唆に富んだ随筆を読みました。

(成田 滋 2021年9月12日)